

第二言語習得におけるインプットの果たす役割：

認知的アプローチを中心に

服部 孝彦（大妻女子大学）

Key Words: 第二言語習得、インプット仮説、理解可能なインプット、認知的アプローチ

1. 研究の背景

1960年代後半以降、第二言語習得研究が盛んに行われるようになり、様々な理論が提示された。そのなかで最も影響力があったのはインプット、インタラクション、アウトプットに関する理論である。この三つの理論はそれぞれ独立した概念であるが、第二言語習得研究発展の一連の流れの中で連続的に提唱され、Block (2003) は **Big Theory** とよんだ。インプット仮説 (input hypothesis) は Krashen (1981, 1982, 1985) により提唱され、インプット仮説を発展する形で Long (1983, 1996) によりインタラクション仮説 (interaction hypothesis) が、インプットだけでは不十分だという主張により Swain (1985, 1995, 2005) のアウトプット仮説 (output hypothesis) が提唱された。インタラクション仮説ではインタラクションにおける修正や意味交渉の重要性が、アウトプット仮説ではアウトプットの重要性が指摘されている。これらの三つの理論は、主張が異なるものの、いずれもインプットが第二言語習得に大きな役割を果たすのは明らかであるという立場である。

本研究の目的は第二言語習得におけるインプット理論について、認知的アプローチを中心に考察することである。そのためにインプット理論について、インタラクション理論、アウトプット理論にも触れながら論じる。続いて第二言語の習得過程についての考察も行う。

2. 研究の概要

2.1. インプット仮説

Krashen (1982) は行動主義 (behaviorism) に基づく言語教授法に対して疑問がもたれるようになった 1970年代にモニター・モデル (monitor model) を唱えた。モニター・モデルは五つの仮説により構成されている。その五つとは、「習得・学習仮説」(acquisition/learning hypothesis)、「モニター仮説」(monitor hypothesis)、「自然な順序の仮説」(natural order hypothesis)、「インプット仮説」(input hypothesis)、「情意フィルター仮説」(affective filter hypothesis) である。Krashen (1985: vii) は “the Input Hypothesis forms part of what I call, perhaps audaciously, a theory of second-language acquisition, and it has become clear to me over the last few years that the Input Hypothesis is the most important part of the theory” と述べ、五つの仮説のなかでインプット仮説が最も重要であるとして述べている。

Krashen (1985: vii) はさらに “The Input Hypothesis claims that humans acquire language in only one way – by understanding messages, or by receiving ‘comprehensible input.’” と述べ、言語習得における大量の「理解可能なインプット」(comprehensive input) の重要性を強調している。Krashen によると「理解可能なインプット」とは次のとおりである。学習者の現在の言語レベルを “i” とすると、それに多少知らない単語や文法などが含まれる、すなわち学習者の現在の言語レベルをほんの少し上回るレベルのインプット “i+1” が「理解可能なインプット」である。“i+2”、“i+3”、“i+4” のようにインプット・レベルが難しすぎても、“i-1”、“i-2”、“i-3” のようにインプット・レベルがやさしすぎても言語の習得は上手くいかないとしている。

Krashen は、「理解可能なインプット」を理解することのよってのみ言語を習得すると述べ、話す力は学習者がインプットを理解することを通して言語能力を獲得すれば、おのずから身につくものであると主張した。インプット仮説は「理解可能なインプット」の定義が曖昧なことなどにより理論上の不備が指摘され、心理学的なプロセスの説明が不十分なため、実証も不可能であるという批判を受けた。そして Krashen 理論を発展させた仮説が登場した。

2.2. インタラクション仮説とアウトプット仮説

Krashen のインプット仮説を発展させる形で登場したのが Long (1983, 1996) によるインタラクション仮説である。この仮説は、リスニングやリーディングによる一方向のインプットより、会話の中で意味交渉することの方が理解に結びつくという主張である。Long のインタラクション仮説は、インプット仮説の延長上の理論であり、あくまでインプットに焦点があてられた。これに対して Swain (1985, 1995, 2005) は、インプットだけでは不十分で、アウトプットが不可欠であると主張し、アウトプット仮説を提唱した。Swain の理論は、アウトプットをすることで文法処理に注意を向けるなど、第二言語習得に必要な様々なプロセスがうながされると述べている。

以上のように Krashen の理論は発展したが、第二言語習得において、どのような理論的立場に立とうとも、まずインプットがない限り言語習得はあり得ないという考え方は共通であり、提示されたインプットをどうすれば習得できるかが最重要課題である。

2.3. 言語の習得過程

Krashen (1981, 1982, 1985) がインプット仮説を提唱して以来、様々な立場から実証研究が行われ、インプット仮説は批判されてきたが、言語習得におけるインプットの重要性についての異論は出ていない。学習者は目や耳からインプットされる言語データを理解できるものに変えてインテイクし、アウトプットにつなげる必要がある。第二言語習得プロセスのモデルはいくつもあり、それらをまとめるのは難しいので、習得プロセスの代表的モデルとされている Ellis (1994) と Gass (1997) のモデルを言語習得の共通理解のために考察する。

Ellis (1994) は第二言語習得の認知プロセスを、「インプット」(input)→「気づいたインプ

ット」(noticed input)→「理解できたインプット」(comprehended input)→「インテイク」(intake)→「暗示的知識」(implicit knowledge)→「アウトプット」(output)と示した。そして明示的知識 (explicit knowledge) が「気づき」、「理解」、「アウトプット」に貢献していることを明確にした。Ellis (1994) の第二言語習得認知プロセスのモデルは、教室第二言語習得研究 (second language acquisition classroom research) には示唆に富むものであり、その後の第二言語習得における指導の役割についての多くの研究へと結びついた。

Gass (1997) と Gass & Selinker (2001) は、「気づき」の認知プロセスを重視し、インプット仮説とインタラクション仮説を統合し、次のような第二言語習得モデルを提唱した。「インプット」→「気づき」→「理解」→「インテイク」→「統合」→「アウトプット」。Skehan (1998) は、「気づき」はインプットの言語形式の頻度や卓立性だけでなく、学習者の過去の言語経験や認知的レディネスなども関わってくると述べている。「理解」とは、意味交渉による理解である。気づいて理解されたインプットはインテイクになる。またインテイクは仮説検証 (hypothesis testing) のプロセスでもある。この仮説検証のプロセスとして正しいと確認された仮説は文法知識として中間言語 (interlanguage) の中に統合され、必要に応じてアウトプットされる。このような言語処理も言語学習のための処理も動作記憶 (working memory) で認知的に行われているといえる。

3. おわりに

本稿では、第二言語習得におけるインプット理論について、そして第二言語の習得過程モデルについて、認知的アプローチを中心に論じてきた。しかし第二言語習得には、認知的アプローチと社会的アプローチがある。認知的アプローチとは、第二言語学習者の個人個人が持っている第二言語能力を他と切り離して考察しようとするアプローチである。これに対して社会的アプローチとは、第二言語能力を取り出して分析することはせず、その能力を持つ人も、その能力が使われるコンテクストも切り離せないと考える。すなわち人も社会も含めた全体を見ていくのが社会的アプローチである。認知的アプローチと社会的アプローチとでは第二言語習得を違う視点でとらえている。第二言語習得研究は、どのような視点から、どのような理論の枠組みを用いて研究するかで、収集するデータも異なってくる。今後は、言語学習を人間関係や社会的コンテクストの視点から捉えた Norton Peirce (1995) のアイデンティティ理論 (identity theory)、個人と環境は一体であり、他者との社会的交流を通じて様々な能力が発達すると捉えた Vygotsky (1962; 1978; 1987) の社会文化理論 (sociocultural theory) についても検討し、認知的アプローチとは別の視点から第二言語習得を考察する必要がある。

参考文献

- Block, D. (2003). *The social turn in the second language acquisition*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Ellis, R. (1994). Theory of instructed second language acquisition. In N. Ellis (Ed.)

- Implicit and explicit learning of languages* (pp. 79-114). San Diego, CA: Academic Press.
- Gass, S. M. (1997). *Input, interaction, and the second language learner*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Gass, S. M., & Selinker, L. (2001). *Second language acquisition: An introductory course, 2nd Edition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Krashen, S. D. (1981). *Second language acquisition and second language learning*. Oxford, UK: Pergamon.
- Krashen, S. D. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford, UK: Pergamon.
- Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. London, UK: Longman.
- Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4, 126-141.
- Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 43-468). San Diego, CA: Academic Press.
- Norton Peirce, B. (1995). Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. M. Gass & C. G. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seildhofer (Eds.), *Principles and practice in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 471-483). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Vygotsky, L. S. (1962). *Thought and language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Vygotsky, L.S. (1987). Thinking and speech. In R.W. Rieber & A. S. Carton (Eds.), *The collected works of L. S. Vygotsky, Volume 1: Problems of general psychology* (pp. 39-285). New York: Plenum Press. (Original work published 1934.)